原告団

第百号

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

原告団レポート

CO患者――木下輝夫さん

際立つ衰え

大正十一年七月二十六日生まれのCO患者――木下輝夫さんは、満五十五歳。この七月二十五日に停年を迎え、三十八年間も在籍してきた三池炭鉱を退職した。

彼は、先年政府から障害補償等級の十二級を押しつけられ、わずかな一時金（手切れ金という方がより正確）ですでに労災補償を打ち切られた身。

今木下さんは、荒尾市下井手開一五四九番地に住んでいる。売りに出ていた家屋敷が運よく手にはいり、長く住み馴れてきた三井鉱山社宅（同市緑ケ丘楓町）からここへ移り住んだ。昨年の四月末のことである。

妻のセイ子さんは、大正十三年生まれの五十三歳。

子どもは三人。長男が伸二さんで二十六歳。すでに千賀子さんというお嫁さんがあり、二人の間には千代美ちゃんという三つの子どもがいる。長く名古屋で働いていたのだが、両親の将来を思い昨年の末こちらへ帰ってきた。今、両親とともに住みながら、近くの企業に通い働いている。

ひとり娘の千代子さんが二十三歳。他家へ嫁ぎ、大阪に。

二男を行広さんと呼ぶ。二十一歳。名古屋で働いている。

ほかに、実母のチョノさんが家に寝起きしているが……。

「どうしたことからか、どの子も私より『お父さん、お父さん』で、主人によく気を使ってくれるので助かります」とセイ子さん。事実娘の千代子さんからはよく電話で父親の消息を聞いてきたり、贈りものを寄せたりしてくる。この夏も、ジンベイやシャツなどを送ってよこした。父親――輝夫さんのことが、よほど気がかりなのであろう。

木下輝夫さんの身は、だれの目にも衰えが歴然としている。頬はすっかり落ちこけてしまった。妻のセイ子さんは思いっきり両手を広げ、その格好をして見せながらいった。

「以前の主人は、こんなに太っておりました。今は、昔の面影はどこにもありませんけれど、今の三倍くらいはあったでしょう」

消えぬ記憶

彼は、もと仕繰工だった。実は入社（昭和十四年九月九日）この方製罐工として長く坑外職場で働いていたものの、低賃金の坑外労働では暮らしが立たないところから、自らすすんで坑内労働に移してもらったのだという。

その日――昭和三十八年十一月九日、木下さんは二番方勤務のため入坑したばかりだった。三川鉱二十一卸（坑口からほぼ三千五百メートルはいった箇所）の三片付近で、ちょうど払採炭で使う材料の運搬計画を立てているときのことだった。

先山は早川正さん（CO患者。今大地評曙病院入院中）だった。

スッ、と停電して、辺りが真っ暗になった。機械の音もとまり、一転して静まりかえった坑底。

先山の早川さんは「寝とけ、寝とけ」というし、みんなもこれさいわいとばかり思い思いにその場に寝ころがったものである。

停電したまま、電灯はつかなかった。しばらくたった頃、真っ黄いろな煙がパーッと流れてきたかと思うと、スーッと何ごともなかったもののように通り過ぎていった。それがあの恐ろしいガスだとは知るよしもなかったが、そのうち一係員が木下さんたちの安否を気づかい、さがしにやってきたことからただならぬ事態が発生していることを知り、びっくり仰天。あわてて人車乗り場へかけつけたところで、二度びっぐり。すでに坑道には、まるで肩を寄せ合うようにしながらおびただしい人間が死んでいたのである。ただキャップランプの光だけが何ごともなかったかのように、奇妙に交錯しながら炭壁のそこかしこをじっと照らしたまま動かなかった。

真面目人間

ことを知った木下さんの妻のセイ子さんは取るものもとりあえず三池労組三川支部にかけつけ、夫の帰りを待ちうけた。死亡者の氏名が告げられるたびに襲いくる胸騒ぎ。

そんなセイ子さんのもとへ木下さんが帰ってきたのは、もう夜ふけのことだったのである。

別に変ったところもなさそうに見えた。が、彼はやがて「腹が痛い」、などといい出した。吐き気も加わってきた。

ついに三井平井分院へ。診察もそそそこに、医者は即座にいった――「ガスにやられている」。

入院こそしなかったものの、その日から木下さんの療養生活がはじまった。

二人は二十四年三月二十八日に結婚したが、もともと木下さんの人柄は真面目一方の人だった。日曜出勤もいとわぬ働き手で、職場では常に人の先に立っていた。近くに住む人（同じ三川鉱の坑内で働いていた）が、避けられぬ用事があって、職場に勤務中の木下さんのもとをたずねたことがあるらしく、つぐづく感心した面もちで「どうし、ご主人は現場では親分ですばい」と妻のセイ子さんに語ったことがある。

手先も効く人だった。五重の培や宝船などの紙細工から、ちょっとした指物にいたるまで手がけていた。三池闘争中は、ホッパーパイプづくりの名人の一人だった。

読書家でもあり、特に時代小説を読みふけった。

酒は好きで、晩酌を心からたのしんだ。でも給料袋はきちんと封も切らず持ち帰ってくるのが常だから、ほどよい酒のたしなみ方だったに違いない。

三池闘争のときのことも思い出される。仲間たちとともに、歯を食いしばって闘ってきた二人。特に久保清さんが会社おかかえの暴力団に刺殺され、また竹下勇吉さん（CO患者）が片方の目玉をえぐり取られたことへたぎり立った働く者の怒りの火の消えることはないだろう。

人間が一変

その、木下さんの人間が大爆発被災を機にどろりと変わる。

無類の働き手が、仕事嫌いに。

坑内で長く働いてきた炭鉱労働者には、停年退職と同時に五十五歳から給付される厚生年金があるものの、坑内経験がわずか一年数カ月に過ぎなかった木下さんはそれも、満六十歳まで待たなければならず。失業保険からの給付が完了すれば、彼は果たしてどうなることか。「こんな体にされてしまった主人です。雇ってくれるような物好きな企業なんか、あるはずもないでしょうし、先ざきのメドが立ちません」、と語るセイ子さんの表情は暗い。

思い出数々

今思い出される、夫木下さんを守るためのあの闘い、この闘い。

東京の街頭でビラを配ったり、闘争支援カンパを呼びかけたりしたこと。三井鉱山本社にかけこんで会社幹部につめより、「お父さんを元の体にして返せ」と抗議したこと。

CO患者家族仲間が、三川鉱の坑底に飛びこんで決死の坑底座りこみを敢行したのに呼応して、東京の労働省前でハンストに突入したあの日の思い出。それは、CO特別立法を要求して立ったときの闘いだったが……。

「今はせめて、三池大災害裁判に勝つことだけです。それには、後に残る人たちにこれまで以上にがんばってもらわないと……」

セイ子さんの言葉を聞いたか聞かなかったか、木下輝夫さんは自宅の縁先の椅子にただぽつんと腰かけていた。

木下さんの家は高台のはずれ。南の方は、三井が経営するグリーンランドを眼下に、天気のよい日などはるか海の彼方にそびえる雲仙岳までが眺められるところ。

またとないこの環境が、CO患者＝木下輝夫さんにどって果たしてどんな意味をもっていることだろう。

☆　☆

ちょうど鍋をかぶせられたような気分

たとえようなき頭痛

先々のメド立たぬ不安

気が向かなければ、器用な手を持っているのに何一つやろうとしない。たとえやり始めても根気がなく、長続きしない。テレビにさえ、これという関心を示さない。

あれほどの読書欲はどこへいってしまったものやら。それからというものは、一枚のハガキさえ妻のセイ子さんが書かなければならぬ。

はるかに限度を突き破って、酒をあおりはじめた。飲みたい酒がないとなると、たとえどんな夜なかにでも、セイ子さんを酒買いに追いやった。

悲しいことに、それはCO患者に共通することでもあるのだが、一度カーッときたが最後、彼は感情をはげしく爆発させる。「折角買ってきてもらった酒ビンを、思いっ切り投げつけて粉微塵に打ち割ってしまうこともあるですもんね」、とは木下さん自身の述懐。

かといって、「自分はいったい何に腹が立ったのか、後で考えるとどうしてもわからない」というのだから、手のほどこしようがない。

もっとも、その後ひょんな失敗から頭に重傷を負い、そのため頭開大手術を受けたこと三度。ついに先頃、そのうえ彼は胆石切除の大手術まで受けた。そのためか、今は一滴の酒も飲めなくなったが、それがまたCO中毒のために決定的な打撃となり、体力の衰えがいよいよきわ立ってきて、まわりの人びとを不安がらせているのである。

「雨降り前になると、きまって頭痛でしょう。その頭痛も何にたとえたらよいか、ちょうど鍋をかぶせられ、そのうえから力いっぱい押さえつけられている気分です。そうなるともう、何にでもカーッとなってしまうとですたい。自分でどうにも押さえがきかんとですもんね」

木下さんは頭を両手で鷲づかみにし、顔をゆがめて見せながら苦しみをこう語る。

明日の不安

木下さんの妻のセイ子さんは、今住まいのすぐ近くの三井グリーンランドで働いている。いうまでもなく三井資本が経営する子どものための遊び場で、仕事はロープウエイの乗務。朝の九時から夕方の五時までの勤務で、一日の日給額千九百四十円也。賃上げもなく月にしてわずか四万五千円内外にしかならぬという。やっぱり三井だな、と思わずにはいられない。

かんじんの木下さんの月づきの給料が、これまでほぼ十二万円ぐらいだったから、「二人分合わせてやっと一人前の賃金でした」、とのセイ子さんの嘆きも当然だとしなければならぬ。その十二万円ほどの賃金さえ、これからはどこからもはいってはこないのだ。

盆栽への灌水。職場仲間からもらつたものばかりとか。満足な管理ができればよいが。